

高 等 学 校

平成 2 3 年度

教育研究員研究報告書

外 国 語

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	2
III	研究の仮説	4
IV	研究の方法	5
V	研究の内容	6
VI	研究の成果	22
VII	今後の課題	24

研究主題	「思考力・判断力・表現力」を育成する効果的な言語活動の在り方
------	---------------------------------------

I 研究主題設定の理由

21世紀は、「知識基盤社会」の時代であると言われ、このような社会の変化に対応するため、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育むことがますます重要になっている。また、OECD（経済協力開発機構）のPISA調査などの各種調査からは、次のような課題が明らかになっている。

- 1 思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に無答率が高いという課題
- 2 読解力で成績分布の分散が拡大しており、その背景には、家庭での学習時間の減少が見られるなど、学習意欲、学習習慣・生活習慣の課題
- 3 自分への自信の欠如や自らの将来への不安、体力の低下といった課題

これらの課題を改善するため、新しい学習指導要領においても、現行の学習指導要領の理念である「生きる力」を育むという理念は引き継がれることとなり、知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視することがうたわれている。また、『高等学校学習指導要領 解説 総則』「第1章 総説 第2節 改訂の基本方針」には、次のように述べられている。

②知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視すること。

確かな学力を育成するためには、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させること、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむことの双方が重要であり、これらのバランスを重視する必要がある。

このため、各教科において基礎的・基本的な知識・技能の習得を重視するとともに、観察・実験やレポートの作成、論述など知識・技能の活用を図る学習活動を充実すること、さらに総合的な学習の時間を中心として行われる、教科等の枠を超えた横断的・総合的な課題について各教科等で習得した知識・技能を相互に関連付けながら解決するといった探究活動の質的な充実を図ることなどにより思考力・判断力・表現力等を育成することとしている。また、これらの学習を通じて、その基盤となるのは言語に関する能力であり、国語科のみならず、各教科等においてその育成を重視している。さらに、学習意欲を向上させ、主体的に学習に取り組む態度を養うとともに、家庭との連携を図りながら、学習習慣を確立することを重視している。

そして、教科の指導においては、基礎的・基本的な知識・技能を習得させること、知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成することが重視されている。

現在の英語教育では、文法や語彙の理解に重点が置かれ、生徒が英語を使用する時間が限られる中で、英語による口頭導入や英問英答などの適切なインプットがなされておらず、また、インプットされた内容がアウトプットにつながるような効果的な言語活動も不足しているという現状がある。知識・技能を習得させることについては、行われているものの、知識・技能を

活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成することについては十分な成果が得られていない。

本部会では、「思考力・判断力・表現力」を育成する効果的な言語活動を授業の工夫として、知識・技能の習得とそれを活用し、自分の意見や考えを英語で表現できるような一連の流れに着目した。そこで、「思考力・判断力・表現力」を育成する効果的な言語活動の在り方を研究主題として設定した。

Ⅱ 研究の視点

本研究は、次の4点から行った。

1 英語科における「思考力・判断力・表現力」の考察

本部会では、はじめに、英語科における「思考力・判断力・表現力」について、次のように考えた。

思考力：言語や文化における知識を活用し、場面や状況、背景、相手の表情などを踏まえて、英語で発信された情報や考えを的確に理解する力

判断力：英語で発信された情報や考えについて、自己の知識や経験から適否を判断し、英語で自己の考えをまとめる力

表現力：自分の伝えたいことを、場面や状況に応じて、適切な英語で相手に伝える力

2 アウトプットにつながる効果的なインプットの考察

本研究において、「インプット」とは、表現活動につながる背景知識や言語材料（文法項目・語句等）を身に付ける活動とし、「アウトプット」とは、インプットされた材料を用いて表現する活動と定義した。

そして、先行事例を踏まえ、実際に授業で利用できる活動について考察した。アウトプットにつなげるという観点から、どのようなインプットを行わせるのが効果的であるかということに留意し、次のようなインプットを設定した。

(1) オーラル・イントロダクション（英問英答を含む新単元の口頭導入）

Oral Introduction は、英語を使って新しい教材を導入する方法の一つである。英語で生徒とやり取りをしながら、教科書の題材や言語材料を導入する。教師は教材の内容をより分かりやすい英語に置き換えながら説明する。例えば、長い文は単文などの短い文に言い換えたり、新出語彙は既習表現を使って言い換えたり、定義で説明したりする。また、生徒の習熟度に応じて、実物や絵を見せたり、実演したりしながら新しい教材を導入する。絵を利用できない抽象語については、日本語での説明も認めていく。抽象的な題材や難しい話題の場合は、教師が背景知識を追加することで生徒の理解を助けることもある。Oral Introduction である程度内容を把握することができると、その後の授業展開をスムーズに進めることができる。

(2) ティーチャー・トーク（表現の言い換え、英問英答等）

英語を教えるとき、生徒が理解できるように、その生徒の習熟度に応じて、教師は自分の発話を調整して話すことがある。上位校においても、生徒に習熟の差が見られるため、生徒の理解度を観察しながら、closed-ended questions（択一式質問）や open-ended questions（自由

回答式質問)を取り混ぜながら、調整することが必要である。このように調整された英語や話し方は、「ティーチャー・トーク」と呼ばれる。「ティーチャー・トーク」を使用することで、生徒とのコミュニケーションが可能となり、また、生徒の理解が深まることにもつながると考えられている。

(3) 音読活動

内容理解を十分に行い、理解している英文を音読することによって、言語材料(文法項目・語句等)の定着を図る。本研究では、インプットとして位置付ける。音読によって口が鍛えられ、英語らしい音のつながりやアクセントといった特徴をつかむことができるとともに、フレーズやキーワードなどを表現の一つとして定着させていくことが可能になる。音読により、アウトプットできるだけの言語材料を定着させることが可能であるため、アウトプットにつながる効果的なインプットと言える。また、音読に関する先行研究においても、例えば、「音読によって、スペリングと発音の結びつきを強化するとともに、学習した語彙や文法などを内在化でき、また、ワーキングメモリーも鍛えることができる。その結果、文章理解の低次処理と高次処理が高速化して文章理解力と発表能力の基礎ができあがる。」(鈴木 2009)という結果が示されており、音読の必要性及び有効性が証明されている。

3 段階的なアウトプットの考察

生徒の習熟度によって行うことのできるアウトプットを、次のように4段階設定する。その上で、(2)から(4)までアウトプット活動が、生徒の思考力・判断力・表現力を活用して行う活動と考へ、(2)から(4)までのいずれかを授業での到達目標とすることにした。

(1) 補助のあるアウトプット(モデル文の模倣、キーワードを用いて教科書本文の内容を説明する活動や英問英答)

補助のあるアウトプットとは、先行事例では、reproduction(再生)やretelling(再話)の活動を指す。reproductionとは、一度理解した一連の内容について、メモやイラスト・写真などの助けを借り、記憶を頼りに自分なりに表現する活動であり、retellingは、文章を読んだ後にその内容を人に語ることによって理解の促進を図る言語活動である。ただし、本研究では、純粹に、モデル文の模倣、キーワードや絵をヒントに取り込んだ英文(教科書本文など)を再生する活動、聞いたり読んだりした英文の英問英答などの活動を指す。

(2) 上記の活動に自分なりの意見や判断を少しずつ加えたアウトプット

この段階では、上記(1)の活動に加えて、メッセージを伝えることを目標とする活動であり、自分の意見を付け加えたり、聴衆に質問をしたり、ある人物になりきって語ってみたりと少しずつ自由度の高い活動を入れる段階である。この段階から、生徒に目的意識をもたせて、主体的に取り組ませることのできる活動となり、生徒の思考力・判断力・表現力を活用して行う活動となる。

(3) 補助のないアウトプット(スピーチやプレゼンテーション(Show & tell)等)

モデル文の模倣やインプットされた内容の単純な再生等ではなく、自分の意見や伝えたい情報などをまとめ表現する活動で、「スピーチ」や「プレゼンテーション」が代表的な活動である。

「スピーチ」は、自分の考えたことや感じたことなどを自分の言葉で聞き手に論理的に語りかけ、話しかける活動である。この活動を行うには、自分の考えや意見をもっていなければな

らない。「プレゼンテーション」の一例としては、あるテーマについて、調査・分析をし、聞き手に話し手の主張を伝えたり、行動を促したりする活動が考えられる。これらの活動については、自分の意見を述べたり、聴衆に意識して伝えたりすることが可能であり、上記(2)の活動よりも更に、自由度の高い表現活動である。事前に原稿を作成することが可能であり、発表する内容を整理することも可能である。しかし、「原稿を読む」とスピーキングの活動とならないため、注意が必要である。

(4) 発展的なアウトプット (ディベート、ディスカッション)

「ディベート」では、万全な準備ができるのは自分の立論のみである。相手からの反論、相手への反論等、自分の立論とその場の流れによって臨機応変に対応しなければ、ディベートで自分の意見を通すことはできない。

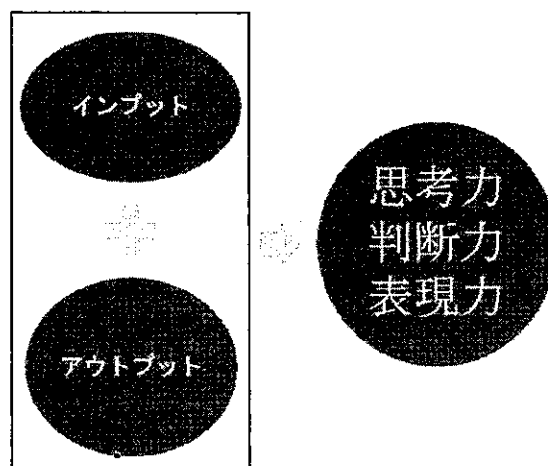
「ディスカッション」は、特に規定を設けない自由討論であり、常に流動的な形式で討論を進める形となる。全くデータの無い、若しくは少ない案件に対して、ディスカッションで互いの理解の幅を深める効果も期待できる。これら活動については、事前準備の枠を超えて、場面に応じて、即興的に表現しなければならず、アウトプットの最終段階といえる。

4 思考力・判断力・表現力につながる、効果的なインプットからアウトプットまでの、一連の流れのある授業研究

これまでの考察から「インプット」から「アウトプット」までの一連の流れを長期的（1年間）・中期的（単元）・短期的（1時間）の3段階において利用し、授業研究を行う。インプットからアウトプットまで一連の流れの授業は全ての学校で可能であると考え、どこの学校においても可能であることを示すとともに、それによって生徒の思考力・判断力・表現力を養えることを本研究で証明する。

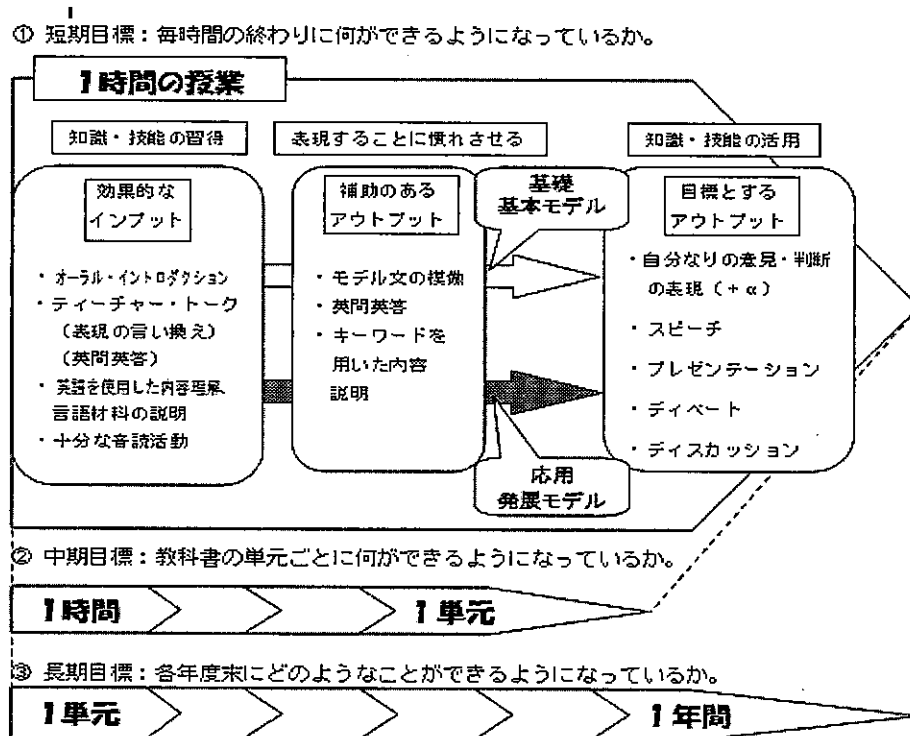
Ⅲ 研究の仮説

適切なアウトプットを到達目標として設定し、効果的なインプットを通してアウトプットを行えば、目的意識をもって主体的に学習に取り組むことができ、生徒は、思考をし、判断をし、表現をする。インプットからアウトプットまでの一連の流れを構築し、実行することで、アウトプットを通して、思考力・判断力・表現力が養われる。



IV 研究の方法

昨年度の研究、「4技能を総合的、統合的に育成する」、「英語の授業は英語を原則とする」を踏まえ、それらを前提とした上で、本研究では、以下のようなインプットからアウトプットまでの一連の流れを作成した。



【図】インプットからアウトプットまでの一連の流れ

- (1) 到達度テスト等を用いて生徒の英語力を把握し、目標とするアウトプットのレベルを下記のカ〜クのいずれかに設定し、インプットからの一連の流れに沿って、1時間の授業を構築し、様々な習熟度で授業実践を行う。

- ア 設定したレベルに応じて、英問英答を含む新単元の口頭導入を行う。
 イ ティーチャー・トーク（表現の言い換え、英問英答等）を通して、単元の題材に関する背景を理解させる。
 ウ 内容理解と言語材料の説明においても、原則として英語を使用する。
 エ 内容を理解した上での十分な音読活動により、言語材料の定着を図る。
 オ 補助のあるアウトプット（モデル文の模倣、キーワードを用いて教科書本文の内容を説明する活動や英問英答等）を通して、表現することに慣れさせる。
 カ 上記オの活動に、自分なりの意見や判断を少しずつ加えるなどして、表現の幅を広げる。
 キ 補助のないアウトプット（スピーチやプレゼンテーション、対話等）を通して、表現力を高める。
 ク 上記オ〜キの活動を発展させ、ディベートやディスカッションを行う。

- (2) 基礎レベル・発展レベルの生徒をそれぞれを対象にした中・長期（単元・1年間）の指導計画を立て、各単元における授業実践を行う。
- (3) 同一教科書を用いて、基礎レベルの生徒に向けたインプット、発展レベルの生徒に対応したインプットのモデルの提案を行う。
- (4) 観察評価、アンケート、到達度テスト（リスニング項目・リーディング項目）等により、検証する。スピーキング活動、ライティング活動、コミュニケーション活動の質的量的変化により、検証する。

V 研究の内容

1 研究構想図

全体テーマ 新学習指導要領に対応した授業の在り方について

高校部会テーマ 思考力・判断力・表現力の育成を図るための授業等についての実践研究

教科等における「思考力・判断力・表現力」の定義

思考力: 言語や文化における知識を活用し、場面や状況、背景、相手の表情などを踏まえて、英語で発信された情報や考えを的確に理解する力

判断力: 英語で発信された情報や考えについて、自己の知識や経験から適否を判断し、英語で自己の考えをまとめる力

表現力: 自分の伝えたいことを、場面や状況に応じて、適切な英語で相手に伝える力

各教科における「思考力・判断力・表現力」の育成の現状と課題

現状: 文法や語彙の理解に重点が置かれ、生徒が英語を使用する時間が限られる中で、適切なインプットがなされておらず、また、インプットされた内容がアウトプットにつながるような効果的な言語活動も不足している。

課題: 場面や状況に応じて、適切な表現を用いて自分の意見や考えを表現するために、思考力・判断力・表現力を養うような効果的なインプットからアウトプットまでの一連の流れを構築する必要がある。

外国語(英語)部会主題

「思考力・判断力・表現力」を育成する効果的な言語活動の在り方

仮 説

生徒の習熟度に応じて到達目標を設定し、アウトプットにつながる効果的なインプットを行い、モデル文を模倣から、自分なりの意見の発表や議論まで、アウトプットのレベルを段階的に発展させる過程の中で、生徒の思考力・判断力・表現力が養われる。

※本研究において、「インプット」とは表現活動につながる背景知識や言語材料を身に付ける活動であり、「アウトプット」とはインプットされた材料を用いて表現する活動である。

具体的方策

到達度テスト等を用いて生徒の英語力を把握し、目標とするアウトプットのレベル(6)～(8)のいずれかに設定し、次のインプットからの一連の流れに沿って活動を行う。

- (1) 設定したレベルに応じて、オーラル・イントロダクション(英問英答を含む新単元の口頭導入)を行う。
- (2) ティーチャー・トーク(表現の言い換え、英問英答等)を通して、単元の題材に関する背景を理解させる。
- (3) 内容理解と言語材料は、原則として英語を使用し、説明する。
- (4) 内容を理解した上での十分な音読活動により、言語材料の定着を図る。
- (5) 補助のあるアウトプット(モデル文の模倣、キーワードを用いて教科書本文の内容を説明する活動や英問英答等)を通して、表現することに慣れさせる。
- (6) 上記(5)の活動に、自分なりの意見や判断を少しずつ加えるなどして、表現の幅を広げる。
- (7) 補助のないアウトプット(スピーチやプレゼンテーション、対話等)を通して、表現力を高める。
- (8) 上記(5)～(7)の活動を発展させ、ディベートやディスカッションを行う。

検証方法

- ・ 観察評価、アンケート、到達度テスト(リスニング項目・リーディング項目)等により、検証する。
- ・ スピーキング活動、ライティング活動、コミュニケーション活動の質的量的変化により、検証する。

2 単元ごとの指導計画のあり方【発展レベルの生徒対象】

まず、発展レベルの生徒を対象にした、中・長期の指導計画及び授業実践について報告する。

(1) 発展レベルの生徒像

ここで発展レベルとして想定するのは、国立大学や難関とされる私立大学を志望し、3学年の3学期にセンター試験とそれに続く個別の入学試験を受ける生徒である。一般的に3学年の入試直前には、限られた時間で多くの英文を読み、文法と内容理解の設問が混在した問題演習を行うための力が求められる。そのため、1、2年の頃から内容理解に重点を置き、英文を日本語に置き直すことに重点を置いた授業が展開されることが多い。しかし、本研究では、生徒ができるだけ多くの英語を用いてコミュニケーション活動を行えるような授業が、生徒の英語力向上に有効であり、入試に際しても大いに寄与することを示す。

(2) 目標の設定

本研究の目標は、思考力、判断力、表現力の育成を図る、すなわち、英語で発信された情報を聞いたり読んだりして理解し、自分のもっている英語力や背景知識を駆使して意見をまとめ、話したり書いたりして、効果的に相手に伝える力を養うことである。そこで、発展レベルの生徒に具体的に何を身に付けさせるかを、長期・中期・短期の目標として、次のように設定する。

ア 長期目標：各年度末にどのようなことができるようになっているか。

1年次 年度末	400語程度の平易な文章を読んだり聞いたりし、受け取った内容についての自分の意見をその場で英語で言うことができる。また、限られた時間内に平易な英語で100語程度の文章に要約することができる（「400語程度の平易な文章」は、「英語Ⅰ」の検定教科書の1課分を想定した。）。
2年次 年度末	600語程度の一般的な文章を読んだり聞いたりし、与えられたテーマに関して、自分の意見をその場で英語で言うことができる。加えて、他人の意見を聞き、それに対する賛成または反対の意見を言うことができる。また、限られた時間内に平易な英語で自分の意見を100語120語程度の単独パラグラフで書くことができる。（「600語程度の一般的な文章」は、「英語Ⅱ」の検定教科書の1課を想定した。）
3年次 年度末	700語程度の特定の分野の文章を読んだり聞いたりし、与えられたテーマに関して自分の意見を効果的な流れをもってその場で英語で言うことができる。加えて、他人の意見を聞き、それに対して議論深めることができる。また、限られた時間内に英語で自分の意見を150語程度の1～2パラグラフ構成で書ける（「700語の特定の分野の文章」は、リーディングの検定教科書、又は大学入試の標準的な長さの長文問題を想定した。また、150語程度の文章は、いわゆる入試における「自由英作文」の語数で設定した。）。

イ 中期目標：教科書のレッスンごとに何ができるようになっているか。

各レッスンの主題に関連したテーマに関して、既習の文章を利用しながら自分の意見を言うことができる。必要であれば他人の意見に対して賛成・反対を述べ、議論を深めることができる。また、決められた時間内にレッスンの1パートごとの構成を考えながらまとめ、自分の意見も添えた文章が書ける。

ウ 短期目標：毎時間の終わりに何ができるようになっているか。

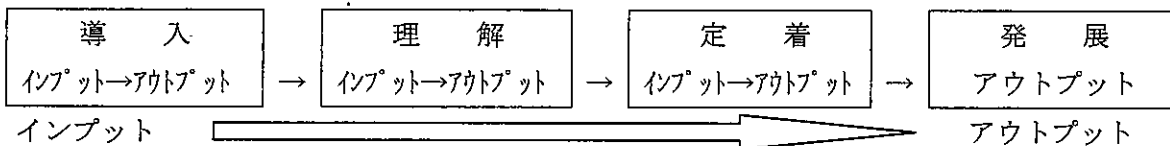
毎時間の終わりに、その授業での既習事項について英語でretellingができる。また決められた時間内に、毎時間の学習内容を要約し自分の意見も添えた文章を書くことができる。

(3) インプットからアウトプットへの流れを意識した授業の組み立て方

授業での指導手順と具体的な活動について、次のように行うことを前提として、インプットからアウトプットへの流れを考えた。

手順	具体的な活動(英語で行う)
1. 導入	・ 口頭導入 (Oral Introduction)
2. 理解	・ 説明 (題材や言語材料の説明) ・ Q&A を行いながらの理解の促進
3. 定着	・ 音読、暗唱 ・ 理解した内容を振り返りながらの Q&A ・ 理解した内容の再話 (retelling)
4. 発展	・ 理解した内容を基にした口頭発表 (スピーチ、プレゼンテーション) ・ ディベート、ディスカッション

指導手順を大きな流れとみた場合、各活動の性質から、インプットに当たるのが口頭導入、説明、音読までの部分である。しかし、それぞれの活動の中にもインプットとみなされる部分とアウトプットとみなされる部分が存在する。例えば、Oral Introduction において、教師が生徒と Interaction を行う場合、生徒は教師からのインプットに刺激を受けてアウトプットを行っており、単独の活動の中にインプット→アウトプットという回路が存在する。すなわち以下のような図式が成り立つ。



以下、毎時間の授業の組み立て方を、順を追って提案する。

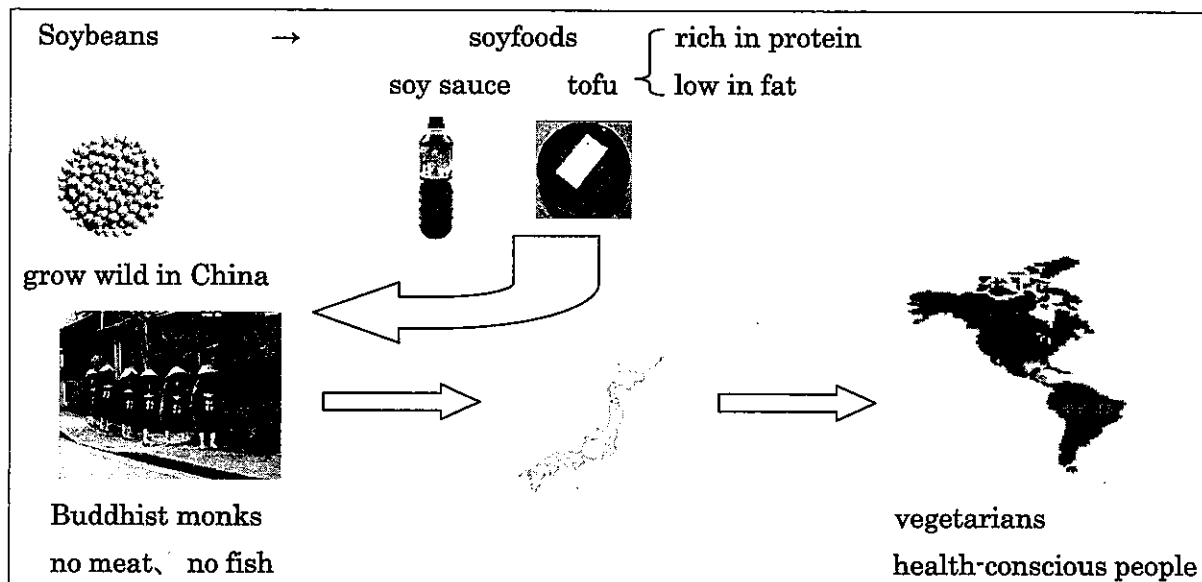
- ① 導入：導入は常に口頭で英語により行う。これから扱う英文の内容と言語材料（文法項目、語句等）を把握した上で、全体の概要や背景知識を提示する。必要に応じて視覚、聴覚に訴える補助具（絵や図表、CD等の音声など）を準備する。生徒には見て聞く（インプット）だけでなく、適宜 Q&A の形で働きかけて英語の発話（アウトプット）を促す。
- ② 理解：導入後に教科書を開けさせて説明を加えながら理解の確認を行う。既習の英語でパラフレーズするなどして生徒には多くの英語をインプットし、理解の確認のために適宜 Q&A 等で生徒に働きかけ、英語の発話（アウトプット）を促す。ただし、文法の説明等で必要であれば日本語の使用も認めていく。
- ③ 定着：導入、理解の段階で使用した英語表現を用いながら、音読・暗唱（インプット）により定着を図る。次に、口頭での Q&A や理解した教材の retelling をさせることで定着度を検証し、さらに、これらの一連の口頭での活動の後で、ワークシート等で書くことによる確認作業を行う（アウトプット）。
- ④ 発展：定着した内容や英語の表現を用いて自分の意見の発表（アウトプット）をする。発表の方法は生徒の発達段階に応じて、読んだ内容の要約の後に自分の意見を付け加える段階から、スピーチ、ディベート、ディスカッションやエッセー作成の段階までが考えられる。

(4) 設定した目標までの指導の流れの実際【実践事例】

使用教科書：UNICORN ENGLISH COURSE I Lesson 5 TOFU:A WORLD FAVORITE (文英堂)

	学習内容・学習活動	配慮事項	評価規準
第1時	<p>【インプット】</p> <p>①【オール・イントロダクション】 Lesson 5 のトピックである豆腐について情報をまとめる。本文で扱われる内容及び更に踏み込んだ内容についてQ&Aにより情報の整理をする。 後の授業で取り扱う新出単語や構文についてはここで口頭練習を行う。</p> <p>②【定着】 整理した内容について再度口頭でQ&Aを行い、よりスムーズに答えられるようにした後、本時に得た情報について書いて記録する活動に入る。</p>	<p>①生徒には必ず文レベルで答えさせる。</p> <p>②絵や写真などの視覚教材を利用する。</p> <p>③情報について書くときには文と文のつながりを意識させる。</p>	<p>①質問に主体的に英語で答えようとしている。 【理解・表現】</p> <p>②口頭練習に積極的に参加している。 【意欲】</p>
第2～5時	<p>【補助のあるアウトプット・インプット】</p> <p>①【復習】 前時の学習内容について生徒が口頭で発表する。(retelling)</p> <p>②【オール・イントロダクション】 本時の取り扱い内容についてQ&Aを取り入れながら情報をまとめる。後ほどretellingする際に必要となるキーワードや文はここで口頭練習を行う。</p> <p>③【説明】 内容及び文法事項についてできる限り英語を使用して確認を行う。ただし必要に応じて日本語の使用も認める。</p> <p>④【定着】 第1時に同じ。</p>	<p>①絵や写真などの視覚教材を利用する。</p>	<p>①質問に主体的に英語で答えようとしている。 【理解・表現】</p> <p>②口頭練習に積極的に参加している。 【意欲】</p>
第6時	<p>【アウトプット】</p> <p>①【Lesson 5 全体の復習】 豆腐について最終的に得た情報を口頭によるQ&Aによりまとめた後、パラグラフの形で書く活動に入る。 書いたパラグラフを使ってこの lesson で得られた情報について発表する。</p>	<p>①英語でまとめる際には最後に必ず自分自身の意見を付け加えさせる。</p>	<p>①質問に対する答えがスムーズに出てくる。【理解・表現】</p> <p>②自分の意見を英語で表現しようとしている。 【知識・表現】</p>

<短期目標 ①口頭発表>の補助になる板書



(導入の際に黒板に作成し、授業の終わりに同じものを印刷して配布する。生徒は口頭発表の練習の際に補助として利用する。)

<短期目標 ①口頭発表、②文章記述>の補助となる質問

(はじめに何も見せずに口頭で十分に Q&A を行い、授業の終わりに印刷したものを配布して答えを書かせる。下線部は生徒が書くべき答え、これを利用すると要約の原型ができ、①、②に利用できる。)

(7) Where did the history of tofu start? Why?

The history of tofu started in China because there were wild soybeans there.

(4) What did the Chinese people do with the wild soybeans?

The Chinese people found that soybeans were good to eat and began growing them. They also created various soyfoods.

(9) Who played an important part in the development of soyfoods? Why?

Buddhist monks played an important role in the development of soyfoods because they needed to eat them instead of meat or fish.

以下略。最後には必ず生徒自身の意見を問う質問をして、意見を表明する習慣を付ける。

(例) Why do you think tofu has become so popular in Japan?

(5) 検証結果・課題

以下に示すのは、生徒の作成したパラグラフ (中期目標②) の例である。トピックはこのレッスンで扱った内容から自由に選ばせた。書き上げるまでに要した時間は10分である。

Topic: Tofu in The United States

In supermarkets in America, we can find not only the same kind of tofu as in Japan but also many new kinds such as teriyaki-flavored tofu, sesame-and ginger-flavored tofu, and mango-and wasabi-flavored tofu. There is turkey-like meat made from tofu, too. Vegetarians and health-conscious people missed the taste of meat on Thanksgiving or Christmas because they had to eat only vegetable while their friends and family were eating a delicious turkey. What they wanted were alternatives to meat. One company made Tofurky for them. I don't think it will sell well in Japan because there are not so many vegetarians and health-conscious people here. But I would like to eat Tofurky. (111 words)

この作品には教科書で用いられている表現が散見されるが、限られた時間内に書き上げたものとしては評価できる。文と文のつながりも不自然さはない。

生徒に対して行った意識調査では、半数の生徒が授業中に英語で話される事柄についてほとんど理解できていると答えた。一方、英語だけでは概要を十分に理解できないと答えた生徒は数%であった。また、導入後に教科書の英文を読む際には、7割の生徒が日本語の助けを借りずに内容をほとんど理解できると答えている。英語で表現された事柄に対して自分の考えを話したり書いたりする力については、「2~3文で自分の考えを発表できる」と答えた生徒は8割であった。書くことに限れば2割の生徒が「単独パラグラフの文章で表現できる」としている。この意識調査から、英語で進める授業に対する生徒の抵抗はほとんどないことが分かる。

一方で、意識調査から、「読むこと」よりも「聞くこと」、「書くこと」よりも「話すこと」により大きな負荷を感じていることが分かった。抵抗感を少なくするためには一定の練習量が必要であることから、その時間をどこで確保するかが課題である。

3 実践事例【発展レベルの生徒対象】

教科名	英語	科目名	英語Ⅱ	学年	第2学年
-----	----	-----	-----	----	------

(1) 単元(題材)名、使用教材(教科書、副教材)

Lesson 5 The Nobel Prize in Water *Magic Hat English Course II* (教育出版)

(2) 単元(題材)の指導目標

ア 2004年に「水のノーベル賞」を受賞した沖縄県立宮古農林高校の生徒たちによる宮古島の飲み水確保のための取組を理解する。

イ 他の地域で行われている水質保全の取組を調べ、宮古島の取組と比較し、自分の意見を付け加えて発表することができる。

(3) 評価規準

	ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 表現の能力	ウ 理解の能力	エ 言語や文化についての知識・理解
本単元の評価規準	①英語で進められる授業に自然に参加することができる。 観察 ②ディスカッションに積極的に参加している。 観察 特に達成できていない生徒のみを記録する。 ③ディスカッションで間違いを恐れずに英語を使っている。 観察 特に達成できていない生徒のみを記録する。	①絵を使って教科書の内容を英語で再現し、それに対して自分の意見を付け加えて発表することができる。 記録 後日一人ずつ発表する。 ②正確な発音と適切なイントネーションで教科書をシャドウイングすることができる。 記録 後日一人ずつのテストを実施する。 ③教科書の要約と自分の意見を書くことができる。 記録 定期考査で評価する。	①質問、呼びかけや指示などの英語を聞いて、適切な反応ができる。 観察 ②まとまった講義やスピーチを聞き、必要な情報を聞き取ることができる。 定期考査 ③まとまった文章を読み、必要な情報を読み取ることができる。 定期考査	①新出語彙を別の既習語で言い換えることができる。 定期考査 ②教科書の文を正しい語順で書くことができる。 定期考査 ③他の地域で行われている水質保全の取組について調べ、自分なりの意見を述べることができる。 記録 オーラルプレゼンテーションの発表を行う。 定期考査

(4) 単元(題材)の指導計画(5時間扱い)

時間	学習内容	学習活動	評価規準(評価方法)
1	Preview Part 1	・「水のノーベル賞」とはどんなものなのかを知る。 ・宮古島の生徒が何故その賞を受賞することができたのか、概要をつかむ。	ア① ウ①
2	Part 2	・宮古島で起こっていた水質汚染の実態を理解する。	ア① ウ①
3	Part 2	・水質保全を推進するために行った宮古農林高校の実験、農業改善への取組を理解する。	ア① ウ①
4	Part 3	・水の確保と水質保全は宮古島だけでなく、世界各地で問題になっていることを知る。	ア① ウ①
5	Part3 Review	・宮古農林高校の生徒たちの研究がなぜ評価されたのか、理由を理解する。 ・宮古島以外の地域で行われている水質保全の取組と比較する。 ・積極的にディスカッションに参加し、他の地域の取組を理解する。	ア①～③ イ① ウ①
後日		・シャドウイングテスト、オーラルプレゼンテーションテスト、定期考査等を実施する。	イ ウ エ

(5) 本時(全5時間中の5時間目)

ア 本時の目標

- (ア) 宮古農林高校の生徒が水質保全の問題に取り組んできたことを理解する。
- (イ) 事前に調べた他の地域の水質保全の活動を、班で情報を共有する。
- (ウ) 間違いを恐れずに積極的にディスカッションに参加する。

イ 本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法 (ア～エ)
導入	1	・英語による挨拶		
	3	・Oral introduction (インプット) Lesson 5 part 1 & 2 の復習 及び part 3 導入	・前時の復習及び本時の導入を英語で行う。 ・復習の部分では、生徒に対する発問を多めにしたり、文を全員で復唱させたりして定着を図る。 ・導入部分は絵などの補助を利用しながら、これから読む部分の要点を簡単な英語で説明をする。	
展開	10	・前時の復習 (インプット)		
		(1) word practice	・スクリーンに表示される新出単語を全員で発音させる。 ・教師はしっかり発音できているか確認する。	ア
		(2)音読活動 Choral reading	・定着活動としての音読を行う。音読練習は、教科書の内容が十分にインプットされてからでない と意味がないため、前時の復習に入れる。 ・リズムや発音に注意しながら教師の後に続いて音読させる。	ア
		(3)音読活動 Buzz reading	・一人ずつ立って音読させる。教師は巡回しながら確認をする。	
		(4)音読活動 Overlapping	・CDの模範音読の音声に重ねるようにして音読させる。	イ②
	(5)Last-sentence dictation	・教師が教科書を読み、途中で読みをやめる。生徒には最後に読まれた文を書き取らせる。	ウ①	
	20	・Reading Practice (インプット)		
(1) Listening	・教師の合図により、スラッシュを入れながら聞かせる。	ウ①		
(2) Word Hunt	・教師が読む内容語に丸を付けさせる。	ウ①		
(3) Questions and Answers (インプット・アウトプット) 各列1人ずつ立たせ、 生徒に質問	・closed-ended や open-ended questions を取り混ぜた教師の英語の質問に対して挙手して答えさせる。 ・生徒には答えたら着席させ、一つ前に座っている生徒に立たせる。 ・答えられた質問数分、その列にポイントを与える。	ウ①		
まとめ	10	・Discussion (補助のないアウトプット)	・各グループの group leader を決め、discussion をさせる。 ・各自持ち寄った情報を元に英語で話し合わせる。 ・グループを回り、うまく議論ができていない班を支援する。	ア②③
	5	・Report (補助のないアウトプット)	・各班の group leader に議論の内容をまとめさせ、発表させる。	
	1	英語による挨拶		

ウ 具体的活動内容

(7) 判断力を養う英問英答

英問英答で本文の内容を理解させるため、Yes・No で答えられる質問から、内容について適否を判断するような質問までバラエティをもたせる。特に以下のように理由を述べさせる設問を行い、生徒の判断力を養った。

<p>T: It says "Japanese are not trained well in expressing their ideas." Do you agree to this statement? S: No. T: Why do you think so? S: Because we have given presentations many times. I think we are well trained.</p>

(イ) プレゼンテーション

補助のあるアウトプットと補助のないアウトプットを組み合わせ、約2分程度のプレゼンテーションを後日行わせた。教師があらかじめ用意した教科書本文の要約(70語～80語前後)を渡し、生徒は絵とキーワードを見てそのモデル文を再生した(補助のあるアウトプット)。レベルの高い生徒は、モデル文を使用せず、オリジナルの要約文を発表させた。

教科書の内容を再生した後、意見を述べる活動を付け加えた。ここでは事前に他の地域で行われている水質保全の取組を自主活動として調べさせ、教科書で出てきた宮古島の取組と比較・対照し、両者の類似点、相違点及び自分の意見を70～80語前後で述べさせた。前述の教科書の再生文と合わせて150語程度の2段落構成の文章ができあがり、2分程度のプレゼンテーションとなった。生徒が実際に発表した原稿は次のとおりである。

(補助のあるアウトプット) Three students from Miyako Agriculture and Forestry High School discovered chemical fertilizers were polluting the ground water, and the nitrate levels were near the limit set by international standards. To solve that problem, they found bacteria which turn nitrates into nutrients. The nutrients were made into organic fertilizers, and farmers in Miyako island used them in farming. Since they put their finding into practical use, they won the Stockholm Junior Water Prize in 2004. (74 words)

(補助のないアウトプット) There are several ways to save our drinking water. In Miyako Island, the students made organic fertilizers to save the ground water. In contrast, JICA has helped Phnom Penh, the capital of Cambodia, to build a high quality water supply system from which we can drink water directly. In addition to that, in Uganda, they have built wells and supported Ugandan people to manage and maintain them by themselves. I believe international cooperation is also important to save the water. (80 words)

(ウ) ディベート・ディスカッション

ここでは、“What should we do to save our water?”というテーマの下、4人一組でディスカッションを行った。事前に他の地域で行われている水質保全の取組を調べさせているため、調べてきた内容を共有し、まとめさせることが目的である。まず、メンバー全員から調べた内容、意見を聞き出す役割のディスカッションリーダーを決めた。リーダーはディスカッションの最後にグループで何を話し合ったのか発表しなければならないので、他のメンバーに聞き、ディスカッションシートにメモをとる。ジェスチャー等を駆使して相手に伝えようとする生徒の姿を見ることができた。

(6) 本時の振り返り

本時は、発展的なインプットであるディスカッションを到達目標として設定し、インプットからアウトプットまでの一連の流れを追った授業を行った。ディスカッションで自分の意見を述べる活動を行うため、その準備として英問英答では open-ended questions(自由回答式質問)を増やし、意見を述べさせ、判断力を培った。また、ディスカッション活動や後日行ったアウトプット(プレゼンテーション活動)を通じて表現力を培った。後日取ったアンケートから、生徒自身、「頭の中で日本語を通さずに自分の意見を大分表現できるようになった」と、表現力が向上したことを実感している様子がうかがえた。

4 単元ごとの指導計画のあり方【基礎レベルの生徒対象】

次に、基礎レベルの生徒を対象にした、中・長期の指導計画及び授業実践について報告する。

(1) 基礎レベルの生徒像

ここで基礎レベルとして想定するのは、中学までの基本的な文法知識や語彙力が十分ではなく、英語を読んだり聞いたりすることや、自分の意見や考えを英語で相手に伝えたりすることに苦手意識をもっている生徒である。そのため、基礎レベルの生徒への手立てとして、英語に対する苦手意識の払拭と、基礎・基本を確実に定着させることに重点を置いた授業が展開されることが多い。本研究では、基礎レベルの生徒ができるだけ多くの英語表現に触れ、自己表現等を通して自己肯定感を高めたり、変化のある繰り返し学習を通して自信を付けたりする指導の一例を示した。

(2) 目標の設定

本研究の目標はⅤ研究内容 2-(2)でも述べられている。そこで、基礎レベルの生徒に具体的に何を身に付けさせるかを、長期・中期・短期の目標として、次のように設定する。

ア 長期目標：各年度末にどのようなことができるようになっているか。

1 学年年度末	<ul style="list-style-type: none">教科書本文レベルの英文 50 語程度を日本語に訳さなくても理解できる。自分の意見や考えを、モデル英文を参考にしながら 1 文 6 語前後の長さで、3 文程度の英文を書いたり、原稿を見ないで話したりできる。
2 学年年度末	<ul style="list-style-type: none">教科書本文レベルの英文 100 語程度を、日本語に訳さなくても語順通りに理解できる。自分の意見や感想、出来事を 30 語程度の英語を用いて書いたり、即興で話したりできる。
3 学年年度末	<ul style="list-style-type: none">教科書本文レベルの英文 200 語程度を、日本語に訳さなくても内容や要点、書き手や話し手の意向を理解できる。ニュースで取り上げられる社会問題などを 50 語程度の英文で書いたり、即興でスピーチができたりする。

イ 中期目標：教科書のレッスンごとに何ができるようになっているか。

授業での既習事項についてのリテリングができる。また、教科書の英文をモデルとし、一部の語彙を置き換える等しながら英文を作成し、自分の意見や考えを相手に伝えることができる。また、単に言語材料（文法項目、語句等）を指導するのではなく、英文の内容に込められたメッセージを読み取らせた上で、アウトプット活動を行うことで知的好奇心が喚起される。

ウ 短期目標：毎時間の終わりに何ができるようになっているか

発表語彙*のスペルが書ける。また、既習事項の基本的な構文を英語で書いたり、言ったりすることができる。*発表語彙とは自分の意思を口頭あるいは書面において適切な語形を通して伝えることができる語彙をいう。(例：Laufer 1998；Laufer and Paribakht 1998)

(3) インプットからアウトプットへの流れを意識した指導過程

発展レベルと同様の手順であるが、基礎レベル特有の配慮事項がある。【(4)の項目を参照】
授業は原則として英語を用いて行う。

手順	具体的な活動
1 導入	・口頭導入 (Oral Introduction) ・生徒の知的欲求を高めるためのオーラル・イントロダクション
2 理解	・題材や言語材料の説明 ・Q&A を行いながらの内容理解
3 定着	・変化のある音読練習 ・理解した内容を振り返りながらの Q&A
4 発展	・学習した言語材料を実際に使う活動 ・学習した題材を生かし、自分の意見や考えを伝える活動

なお、指導手順の具体的説明については、8 ページの V 研究の内容 2 単元ごとの指導計画のあり方【発展レベルの生徒対象】-(3)と同様であるので省略する。

(4) 設定した目標までの指導の流れの実際【実践事例】

授業の組み立ては計画的に行い、評価と指導に一貫性をもたせる必要がある。ここでは (5) で紹介した授業における観点別評価の規準表例を提示する。

なお、評価規準は実際に教師が評価し、記録できるものに絞ることが必要である。

使用教科書：Open Door to Oral Communication I Lesson4 「The Field Day」文英堂

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 表現の能力	ウ 理解の能力	エ 言語や文化に関する知識・理解
①相手に適切に伝わるように発言している。【観察記録法】 ②学校行事に関する情報を相手に伝えようとしている。【制作物法】	①質問に対して、適切に答えることができる。【観察記録法】 ②モデル英文を参照しながら、意見や考えを書くことができる。【制作物法】	①抑揚や強弱を意識しながら読むことができる。【観察記録法】 ②英文を聞いたり読んだりして、学校行事に関する情報が理解できる。【観察記録法】 ③英文の内容を理解できる。【テスト法】 ④友人の紹介文を聞き、内容が分かる。【制作物法】	①語彙や語法の適切な使用方法が分かる。【観察記録法】 ②適切な表現や語法が使える。【制作物法】

	学習内容・学習活動	配慮事項	評価規準
第1時	【インプット】 ①【オーラル・イントロダクション】教科書本文の内容語を英問英問形式で聞き取る。 ②【内容理解】教科書本文の聞き取り、内容理解を行う。 ③【本文の定着】教師の後に続いて音読を行う。確認テストを行う。	①【オーラル・イントロダクション】における配慮事項 一人一人にレベルに配慮した発問を行う。 なお、英文中の未知語の割合が述べ語数の2パーセントを超えている場合、英文の負荷を下げることに主眼を置いたオーラル・イントロダクションを行う必要がある(注1)。	ウ① ウ③
第2時	【インプット】 ①【前時の復習】前時の復習として教科書の音読を行う。 ②【定着】 ・英文に関するQ&Aに答える。(retellingの原稿になる。) ・原稿を使用し、retellingの練習を個人で行う。 ・原稿を使用し、ペアでretellingの練習を行う。	②【定着】(Q&A)における配慮事項 生徒の誤答に対しては“That’s a good idea! But, boo! / “Why do you think so?” 等と発言を受容した上で、生徒がなぜそう考えたかの思考過程を大切にする。	イ① イ② イ②

第3時	<p>【補助のあるアウトプット活動】</p> <p>①【復習】 ペアで retelling の練習を行い、発表英文を再確認する。</p> <p>②【応用】 ピクチャーカードを見ながら、retelling をペアで行う。発表者以外の生徒は、発表者の良い点を記録用紙に記入する。</p> <p>③【定着】 retelling の英文の定着確認テストを行う。</p>	<p>②【応用】における配慮事項</p> <p>発表に対しての心理的プレッシャーを下げるために自己表現によって自己肯定感を高め自信を付けられるような配慮が必要である。したがって肯定的評価を生徒同士にさせる。一方で、教師から生徒へのフィードバックは、どのようなポイントに気を付ければより良いリテリングができるのか、個別に伝えることで意欲喚起につなげる。</p>	<p>ア①</p> <p>ア① エ①</p> <p>エ②</p>
第4時	<p>【アウトプット活動】</p> <p>①【オーラル・イントロダクション】 絵や写真を見ながら、本時のトピックを予想する。</p> <p>②【理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「①」で提示された絵や写真の語彙を確認する。 ・世界の学校行事の紹介文を聞き、何であるか答える。 <p>③【定着】 英文を読み、多く使用されている表現をマークする。</p> <p>④【応用】 自分たちの学校行事の紹介文を作成する。</p>	<p>④【応用】における配慮事項</p> <p>本来、生徒の発言はできるだけ英語を使用させたいが、自己表現したい単語等が分からない場合は日本語で言わせ、教師が英語でどのように表現すれば良いのかを例示し、生徒を援助する。</p>	<p>ウ②</p> <p>エ①</p> <p>ウ②</p> <p>エ①</p> <p>イ②</p>
第5時	<p>Lesson4 p. 26 に基づいた活動</p> <p>【アウトプット】</p> <p>①【定着】 ペアで紹介発表の練習を行う。</p> <p>②【応用】 自分の意見や考えを発表する。その際、他の生徒は発表者の様子を見て、良かった点を記録用紙に記入する。</p>	<p>①【定着】における配慮事項</p> <p>生徒の定着度を上げるため、学習意欲を喚起するような形成的評価(注2)を行いながら、活動を進めていく。例えば、「○○のペアは内容語を強く読んだりしながら、英語の内容が分かりやすく伝えられるように工夫している」など、具体的に何が良いのか指摘することで、一人一人の学習意欲が向上するだけでなく、定着のための具体的方法が明確になる。</p>	<p>ア①</p> <p>ア② ウ④</p>

(注1) 英文読解において、未知語の割合が延べ語数の2パーセントを超えた場合、十分な内容理解は困難であるとの主張があることに基づく。(Nation 2001)

(注2) ベンジャミン・ブルームによる評価手法で、指導の途中でそこまでの成果を把握し、その後の学習を促すために行う評価のことである。

(5) 検証結果・課題

基礎レベルの生徒であってもオールイングリッシュの授業に対して抵抗感を示すことなく、更に自ら進んでアウトプットに取り組んでいたことが特徴であった。また、今回の研究でアウトプットを生徒に意識させることで、アウトプットするためにはインプットの段階できちんと定着させておかなければならないことを生徒が認識し、その結果、インプットが活性化していく様子が見て取れた。さらに、インプットが活性化することでアウトプットも充実し、インプットとアウトプットの相乗効果により生徒の活動が増え、教材の定着が図れた。

今後の課題として、アウトプットで発話したり、書いたりした英文をいかに効果的に内在化していくかが挙げられる。

5 実践事例【基礎レベルの生徒対象】

教科名	英語	科目名	英語Ⅱ	学年	第2学年
-----	----	-----	-----	----	------

(1) 単元名、使用教材 The little doll with blue eyes COSMOS ENGLISH COURSE II

(2) 単元の指導目標

- ア 学んだ話題について、英語で自分の意見を付け加えながら説明をすることができる。
 イ 学んだ話題について、自分の意見を付け加えながら2～3文の英語で書くことができる。

(3) 評価規準

	ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 表現の能力	ウ 理解の能力	エ 言語や文化についての知識・理解
本単元の評価規準	①英語で説明される本文の内容を理解しようとしている。 ②発問やペアワークで、英語で質問された内容に積極的に答えようとしている。	①英語で質問された内容に対して英語で適切な応答ができている。 ②学んだ内容を積極的に英語で説明しようとしている。	①本文の概要を英語で説明されたものをしっかりと聞き取り、理解している。 ②本文や英語での質問を英語で読んで正確に内容を把握できている。	①第二次世界大戦当時の日本でのアメリカの品物の扱われ方を理解している。 ②本文で扱われている語彙の意味や発音が適切に定着している。

(4) 単元（題材）の指導計画（7時間扱い）

時間	学習内容	学習活動	評価規準（評価方法）
1	・語彙の導入 ・内容の導入	・語彙プリントを用いて、必要な語義を確認する。 ・内容の概要をつかむ。	エ② ウ① ア①
2～6	・第二次世界大戦当時の日本の小学校でのアメリカ製の贈り物の人形の扱われ方をめぐった物語による、その当時の状況や気持ちの移り変わり等の読み取り ・キーセンテンスを中心に理解	・Oral Introductionを通して概要を理解する。 ・本文の内容を確認（英問英答）する。 ・音読をする。 ・Pair workを行い、互い内容を確認する。 ・Presentationを行う。	ア① ア② イ① ウ① ウ② エ①
7	・本文全体の概要を英語で説明	・ヒントを頼りに、一人ずつ、本文の概要を英語で説明する。	ア② エ② イ① イ②

(5) 本時（全7時間中の2時間目）

ア 本時の目標

- (ア) 学んだ話題について英語で自分の意見を付け加えながら説明をすることができる。
 (イ) 学んだ話題についての英語での質問に英語で簡潔に答えることができる。

イ 本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法（ア～エ）
導入	15	・Greeting ・Oral Introduction (インプット)	・机上の整理をしっかりとするなど、気持ちを授業に向けさせる。 ・インタラク션을意識させる。必要な場合は音読の指示をする。	ア①
展開	17	・Questions and answers (インプット) ・Explanation ・Reading aloud 本文全体 複数回 (インプット)	・オーラル・イントロダクションともつなげて、Yes、Noで答える簡単なものから内容に関して深く聞くものまでバランスよく準備する。 ・本文内容について英語で質問することでしっかりと理解させる。英問英答だけでは不十分などところの説明を加える。 ・音読が効果的にできるよう必要な説明を加える。 ・リピートを一回、個人読みを一回ずつ行わせる。	ア① ウ① エ①
まとめ	18	・Consolidation (インプット・アウトプット) ・Pair work (アウトプット) ・Presentation (アウトプット)	・キーセンテンスについての簡単な英問英答をさせる。 ・インタラク션을意識させる。 ・ペアで本時の内容を英語で説明させる。 ・目的は暗記ではないことをしっかりと伝える。 ・キーセンテンスを模倣することで、本時の内容の説明を英語で発表させる。顔を上げて発表をするよう指示をする。	ア② ウ②

ウ 具体的活動内容

(7) 判断力を養う英問英答

英文を訳していくことに頼らずに、Oral Introduction やその後の本文理解における英問英答を通して内容を理解させるよう努めた。発展レベルでの実践と同様、Yes・No で答えられる質問をしたり、内容について自分で考えさせるような質問をしたりするなどした。現段階では以下のように Yes・No や二者択一で答えられる質問にしっかり答えさせ、その後、発展させて内容を自分で考えさせる質問をしてみるようにした。しかし、すぐには文章単位で応答できないと判断し、既知の内容を基に応答を導くようにした。

T: When did the doll, Mary, come from America?
S: 16 nen mae! (日本語)
T: In English?
S: Sixteen years ago!
T: Yes, Mary came to Japan 16 years ago. With who?
S: ...?
T: Did Mary come alone?
S: No.
T: That's right. Mary came with 16,000 other dolls as a symbol of friendship.

(4) アウトプット

本時の授業では、オーラル・イントロダクションや英問英答等のインプットに時間がかかり過ぎたため、アウトプットの時間を十分に確保できなかった。その反省から、その後の授業では、インプットの活動時間や難易度を調整し、毎時間、その時間に学ぶべき重要事項 2～3 点について英語で発話する活動を中心に、授業を展開することにした。

本時の授業の補足として、後日、次の文を提示しアウトプットを行わせた。

A military policeman asked Kaneko, "What was in the cabinet?"
He answered, "There are pictures of Emperor in it."

板書等を利用して上記の内容を英語で言わせた後、次のような質問をした。

T: What do you think of Mr. Kaneko? Is he a bad man or a great man?
S: Great!
T: Oh, you think he is a great man!
S: Yes, I think he is great. Because he decided to hide the doll.

単元のまとめの授業では、そのレッスンの概要を口頭で発表する活動を一人一人行なった。内容は、次のとおりである。その発表の際にも生徒が概要を言い終えた後で、"What do you think of this story?" などの質問をした。

The doll, Mary, came from America as a symbol of friendship. He made up his mind to hide Mary inside a cabinet. A military policeman asked Kaneko "What was in the cabinet?" He answered, "There are pictures of Emperor in it." He met Mary again after the war. Every year, students give a presentation about the story.

(6) 本時の振り返り

英語でのやりとりを通して内容を理解することに対する戸惑いも見られたが、基礎レベルの生徒に対しても、前述のとおり質問の仕方を配慮することで、絵などを利用して背景知識を活用して訳を介さずに内容を大方理解させ、自分の判断を加えた英語での応答が実施できた。また、後日実施した毎時間のアウトプットやまとめの活動では、簡単な根拠を含めて自分の意見を言ったり書いたりできる生徒も出てきた。

このように、基礎レベルの生徒対象にも、アウトプットを意識した一連の流れを授業の中で構築することが可能であり、既知事項や背景の状況を利用しながら英語を通して内容を理解し、自分の判断を加えた意見を言う活動が可能であった。

6 同一教材による活動の指導例【基礎レベルと発展レベル】

同一教材を用いて、「基礎レベル」と「発展レベル」と二つの異なるレベルに対してのインプット（オーラル・イントロダクション）の指導例、補助のあるアウトプット（英問英答）の発問例を上げる。同一の教材を使用しても、活動の組立てや工夫によって異なるレベルに対応することができることを示す。

（使用教材：文英堂 Powwow English Course I p.6）

When companies buy things from people in developing countries, they often try to buy things at low prices. Some companies offer a very low price and say, "Take it or leave it!" It is a kind of bullying. It is not fair.

If prices are fair, the people in developing countries can earn enough money to buy everyday things. Now many organizations and people all over the world are trying to be fair when they trade. As a result, you can find Fair Trade products in some supermarkets and shops.

Here is a Fair Trade catalog. Let's look at it.

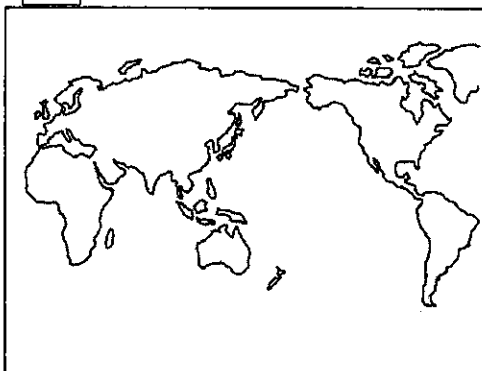
(1) オーラル・イントロダクションの指導例

口頭導入の材料には、下に示した Picture A（世界地図）のような図表、20 ページに示した Picture B のようなキーワードのカード、21 ページに示した Picture C（実際のサッカーボール）といったものを用意し、図に情報を書き込んだり板書を加えたりしながら、口頭導入を行うのが効果的である。また、以下に示した例文中の で囲んだような本文のキーワードを書いたカードをあらかじめ用意しておき、話の流れに沿って黒板に並べていけば、新単元の口頭導入のみならず、授業の後半に生徒に練習時間を与え、黒板の前に出して、キーワードを指し示しながらストーリーのリプロダクション（再話による補助付きのアウトプット）をさせることができる。生徒に再話活動を行わせる場合には、教師の口頭導入は教科書本文に沿った内容とすることが重要である。

基礎レベルにおいては、平易でやや短い英文を用いて、生徒の理解を丁寧に確認しながら行う。必要に応じて適宜日本語を使用してもよい。発展レベルにおいては、使用語彙を増やし、まとまりのある文章で、英文の内容理解を深める。ここでは3点を使って例を示す（Tは教師、Sは生徒を示す）。

例 1

Picture A



【基礎レベルの例】

T: Give me some names of .

S: ...

（板書） Japan、 America、 England、 France、 Germany

T: These are developed countries.（黒板の地図に印をつける）

How do you say "a developed country" in Japanese?

S: ...

T: "developed"、つまりもう発展してしまった国だから？

S: 先進国。

T: That's right. Now give me some names of poor countries.

S: ... T: (板書) Pakistan、Ethiopia、Bangladesh、Peru.....

T: These countries are called developing countries (黒板の地図に印をつける)

How do you say "a developing country" in Japanese?

S: ...

T: "developing"、つまり現在発展している国だから？

S: 発展途上国。

T: Excellent.

【発展レベルの例】

T: Can you give me some names of developed countries in the world? In developed countries people enjoy a high standard of living. Things are expensive, and salaries are high, and the cost of living is high too.

S: ...(英語で) T: (板書) Japan、the United States、Britain、France、Germany

T: How about developing countries? Salaries are low and things can be produced cheaply in those countries, right?

S: ...(英語で) T: (板書) Pakistan、Ethiopia、Bangladesh、Peru.....

例2

Picture B

FAIR TRADE

【基礎レベルの例】

T: What is "Fair Trade"? Japan sells cars, and America buys Japanese cars. That's TRADE. Trade

means 貿易. Japan and America are trading. 貿易している. Now, if I give an easy test for 2-kumi and a very, very hard test for you, you will say, "That's UNFAIR!!!"

What is "unfair" in Japanese?

S: 不公平。

T: Very good. It isn't a good thing, is it?

(板書) fair ⇔ unfair "Fair Trade"の下に、「公平な貿易」と書く。

【発展レベルの例】

T: Today, we will take a look at the system of Fair Trade. What is trade?

S: ... (英語で)

T: That's right, for example, Japan produces a lot of automobiles and other electronic products and the US buys them from Japan. In exchange, Japan buys wheat and meat products from the US. You export and import and exchange products. That is trade.

Countries are trading with each other.

例3

Picture C



【基礎レベルの例】

T: Many boys play soccer in Japan. Do you play soccer?

S: ...

T: How much is your soccer ball? Do you have any ideas?

S: ...

T: Now, this soccer ball is maybe 5,000 yen in Japan. It's very expensive! It's a high price!

It's made in Pakistan. A man is making the soccer ball in Pakistan. He gets only 24 yen for the ball.

That is unfair! The trading company (貿易会社) wants a low price.

(板書) $5,000 - 24 = 4,976$ yen.

T: Where did this money go? (板書を指差しながら)

A lot of companies get this money between Japan and Pakistan.

So, fair trade organizations help developing countries.

They buy at fair prices in developing countries and sell directly to developed countries.

(別に用意したフェアトレードマークを見せながら)

They put a label like this on some products. Have you seen it?

【発展レベルの例】

T: How much does this soccer ball cost in Japan?

S: ...(英語で)

T: Now, this soccer ball is maybe 5,000 yen in Japan.

They are sold at a high price in developed countries.

You can see it's made in Pakistan.

The company which makes the soccer balls in Pakistan may get only 24 yen for the ball.

That is unfair! The trading company tries to buy it at a low price.

(板書) $5,000 - 24 = 4,976$ yen.

T: Where did all this money go? (板書を指差しながら)

S: ...(英語で)

T: A lot of companies are involved in between, such as the local buyers, trading company, the wholesale company, and retail companies like shops and stores get this money as their profit. Now, fair trade organizations try to help developing countries. They purchase at fair prices in developing countries and sell directly to developed countries, giving the profits to the poor people.

(別に用意したフェアトレードマークを見せながら)

They put a label like this on some products. Have you ever seen it?

(2) 英問英答の発問例

基礎レベルの生徒に対しては、基礎的な語彙を用いて closed-ended questions (択一式質問) や、本文をうまく活用できるような「事実発問」(田中・島田・紺渡 2011)を通して、できるだけ生徒に発話を促すことに留意する。

発展レベルの生徒に対しては、open-ended questions (自由回答式質問) や、本文の情報をもとに、本文には直接明示されていない内容を推測させる「推論発問」(同書) や、本文に対する自分の意見や考えを問う「評価発問」(同書)を通して、生徒の積極的な発話を促すように努める。

【基礎レベルの例】

- ア How do you say “a developing country” in Japanese?
- イ What do companies try to do when they buy things from poor people?
- ウ Some companies offer a very low price, and then what do they say?
- エ Is it fair?
- オ How do you say “bullying” in Japanese?
- カ If prices are fair, what can people in developing countries do?
- キ Who are trying to be fair when they trade?
- ク As a result, what can you find in some supermarkets and shops?
- ケ Have you ever seen Fair Trade products?
- コ If you have a chance, are you going to buy Fair Trade products?

【発展レベルの例】

- ア What often happens when people in developing countries sell their products to companies?
- イ Why are companies trying to buy things from poor people at low prices?
- ウ How would you feel if someone offered a very low price and told you “Take it or leave it!” when you tried to sell something?
- エ According to the author, it is a kind of bullying. What do you think about it?
- オ What do you think you can do in order to improve this situation?
- カ If you have seen some product of Fair Trade, can you tell us about it?
- キ Here you have two choices. One is a rather expensive coffee which is the product of Fair Trade, and the other is a really cheap one which is not. Tell us which one you would buy and why.
- ク What might be the potential problems of Fair Trade?
- ケ Imagine you will open some shop selling Fair Trade products. What are you going to deal with and why?
- コ It is true Fair Trade has been attracting much attention as a means of international cooperation, but it isn't common yet. What do you think we need to do for the system to become more widespread around the world?

VI 研究の成果

本部会では、インプットからアウトプットまでの一連の流れによる授業を行うことで、思考力・判断力・表現力が養われることを研究の仮説とした。この研究を通して、以下の成果を挙げることができた。

1 思考力・判断力の伸長

授業実践を行ったある学校では、入学時、英語による発問に対して単語でしか答えられない生徒が大半を占めていたため、文単位で答えられることを目標とし、授業で口頭による英問英答を導入した。その結果、答えに時間がかかっていた生徒も、半年の実践ののち、文単位で答えられるようになり、簡単な質問であれば数秒後に答えることができるようになった。「授業中に英語で話される事柄をほとんど理解できている。」と答えた生徒も半数以上に上り、「考えながら聞くことができるようになった。」と生徒も実感している。これは、生徒が聞いた内容を即時に理解し【理解力】、もっている語彙の中から適切な語句を選び出し【判断力】、文レベルで答える【表現力】という一連の作業を行った結果である。

また、別のある学校では、4月当初、まとまりのある英語を話すことのできる生徒は全体の3割程度であったため、接続詞を使用したリテリング活動を最終目標に、本研究にある一連の流れによる授業を行った。その結果、授業実践後のアンケートにおいて「文と文のつながりを意識しながら【思考力・判断力】、英語を話せるようになった【表現力】。」と答えた生徒が全体の7割程度まで増加した。

2 表現力の伸長

授業実践を行ったある学校の入学試験を分析した結果、表現力を試す記述式英作文の無答率が8割程度だった。そのため、自分の意見や判断を加えて表現をすることを目標として、各レッスンのまとめに、自分の意見や考えを公表する活動を行った。その結果、12月の学力調査問題では無答率が2割に減少した。さらに、インプットで使用された英文を自分なりにアレンジしながら、英文を作成する力が身に付いた。

他の学校では、入学時に書かせた自己紹介文では、自分の意見を書くことができなかった生徒も、読んだ文章の要約に自分の意見を加えた口頭発表を毎時間行った結果、半年後、教科書の内容を要約して、自分の意見を2～3文の英文で書くことができるようになった(10ページ参照)。授業後の意識調査の中でも、英語で表現された事柄に対して自分の考えを話したり書いたりする力について、「2～3文で自分の考えを公表できる。」と答えた生徒は約8割であった。また、ある学校では更に発展させて、各課終了後にディスカッションを行った結果、教科書の内容を1段落で要約することができ、更に自分の意見を1段落構成で書けるようになった(13ページ参照)。意識調査の中でも半数以上の生徒が「自分の考えを単独の段落から成る英語の文章で書くことができる。」と答え、表現力が伸びていることが分かる。

3 一連の流れの有用性

教科書本文の内容理解や音読といったインプットで習得したことを生かし、アウトプットを行ってきた。アウトプットを生徒に意識させることで、「4月当初は教科書をなんとなく読んでいた。しかし、後で、英語で話したり、書いたりしなければいけない活動があると思うと、教科書の英文をきちんと読めるようにしておかなければいけないという気持ちになった。」と、生徒が目的意識をもって主体的に学習に取り組むことができ、学習内容の定着が深まった。このことから、インプットからアウトプットまでの一連の流れが有用であると考えられる。

上記1～3の結果から、インプットからアウトプットまでの一連の流れを構築し、実行することで、アウトプットを通して、思考力・判断力・表現力が養えると言える。

VII 今後の課題

1 事前準備や授業の工夫

授業実践後に行ったアンケートの結果によると、基礎レベルの生徒の9割以上がオールイングリッシュの授業に対して肯定的である一方で、約1割の生徒は不安に感じている。さらに、「先生が話している英語で難しい単語には絵を見せてほしい。」「英語での発話は聞き取れるけれど、質問にどうやって答えたらよいのか単語が出てこない。」といった意見があった。生徒にとって負荷を感じる語彙にはICT等を活用したり、写真や絵を提示したりするなどの工夫が必要である。また、生徒が発話しやすいよう、モデル英文を多く示すことや、定型表現を事前に見せておく等、発話しやすくする工夫が必要である。

また、発展レベルでは、採用している教科書の題材が高度であり、ディスカッションやディベートを行おうとすると、テーマが難しく、「話すこと」に対して負荷を感じている生徒にとって、負担が増えることになる。しかし、難関大学を志望する生徒にとって教科書で扱われている題材は、入試頻出テーマであるため、考えさせたい題材である。そのため、そのような題材でディスカッションやディベートは是非行わせたいところである。高度な題材でディスカッションやディベートを行わせるためには、英語で話さなければならないような段階を踏んだ指導やルール作りなどの工夫が必要であり、その準備が課題となる。

2 繰り返しによる定着を図る工夫

「英語での発表は上手にできたが、終わってしまうと自分が書いたり話したりした英文を忘れてしまい、次に生かせない」という意見もあった。生徒が達成感を味わえるようにするために、表現のノート等にまとめさせ、それを繰り返し読み返させる等、繰り返しによる定着を図る工夫が課題である。

3 「話すこと」に対する負荷を軽減する練習時間の確保

発展レベルの生徒が多く在籍する高校であっても、中学までの学習背景が異なり、入学段階で「聞くこと」「話すこと」に対して負担を感じている生徒は少なくない。入学後、高校で英語による授業を行っても、高校1年生及び2年生の意識調査では、共に「読むこと」よりも「聞くこと」、「書くこと」よりも「話すこと」により大きな負荷を感じていることが分かった。抵抗感を少なくするためには一定の練習量が必要であるから、その時間をどのように確保するかが課題となる。

<参考文献>

- 卯城祐司(2011)『英語で英語を読む授業』 研究社
白井恭弘(2008)『外国語学習の科学』 岩波書店
鈴木寿一(2009)「音読」こそがすべての基本』『英語教育 2009年11月号』 大修館書店
田中武夫・島田勝正・紺渡弘幸(2011)『推論発問を取り入れた英語リーディング指導：深い読みを促す英語授業』 三省堂
新里眞男(2010)「オーラル・メソッドの価値」『語研ジャーナル』 語学教育研究所
西君子(1996)『授業に生きるカウンセリング・マインド』 教育出版
松本茂(2003)『生徒を変えるコミュニケーション活動』 教育出版
松本茂・鈴木健・青沼智(2009)『英語ディベート 理論と実践』 玉川大学出版部
望月昭彦(2010)『改訂版 新学習指導要領にもとづく英語科教育法』 大修館
ブルーム、B.S(1993)『教育評価法ハンドブック-教科学習の形成的評価と総括的評価』 第一法規出版
横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校(2011)『思考力・判断力・表現力等を育成する指導と評価』 学事出版
Rod Ellis (2003) *Task-based Language Learning and Teaching*, Oxford University Press
Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment (Council of Europe, 2001)
Learning Vocabulary in Another Language (Cambridge University Press 2001)

平成23年度 教育研究員名簿

高等学校・外国語

学校名	課程	職名	氏名
都立两国高等学校	全日制	主任教諭	布村奈緒子
都立松原高等学校	全日制	教諭	大西 完国
都立小山台高等学校	全日制	主任教諭	浅野 伸子
都立大島高等学校	定時制	教諭	赤塚 祐哉
都立桜修館中等教育学校	全日制	教諭	中村 隆道
都立永山高等学校	全日制	教諭	○井 慎一郎
千代田区立九段中等教育学校	全日制	主任教諭	中川 弘子

○ 世話人

[担当] 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課
統括指導主事 瀧沢 佳宏
東京都教育庁指導部高等学校教育指導課
指導主事 瀬田 栄治

平成 23 年度
教育研究員研究報告書

高等学校 外国語

東京都教育委員会印刷物登録

平成 23 年度第 181 号

平成 24 年 3 月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320-6836
印刷会社 有限会社 シーダー企画